

終戦の記憶

伐木隊と内山妙典寺

匝瑳探訪

—51—

65年前の昭和20年8月15日正午、昭和天皇はラジオで国民に終戦を伝えました。

この放送を内山（豊和地区）で聞いた文芸評論家で小説家の白井吉見（1905年〜1987年）氏は、のちに長編小説『安曇野』にその体験を発表しています。

当時40歳だった白井氏は、米軍の日本上陸作戦に備え九十九里浜に陣地構築のための用材を調達する任務を負う「伐木隊」の隊長でした。6月下旬には、内山妙典寺が隊の宿营地となりました。

8月14日、「八日市場の町はずれの蚕業試験場」、現在の市役所の所在地にあった蚕業試験場にいた大隊長からの命令で「敵ノ一部上陸の兆アリ」として白井氏の同僚が「野手浜ニ急行シ」たそうです。

翌15日、白井氏は「正午に天皇の放送があると聞き、いよいよ降伏だな、と僕は思った。それにしても、天皇がラジオで国民や軍隊に降伏を説得するとは、僕のイメージになかっただけに、なるほど、この手があったんだな、と政府や天皇側近の打った手には虚をつかれた感があった。」と述べ、「兵隊たちが風呂をもらいに行っている、近くの農家の庭さきで、わが伐木隊

は整列して、放送を待っていた。」とその日の様子を記しています。

「十六日は、一日がかりで、伐採した用材を部落にくぼったり、後片つけやら何やらで忙しく過ぎた。」十七日に伐木隊は解散して、それぞれの中隊へ復帰した。」

現在、内山集落にも伐木隊の行動を記憶している人がいました。「夕方になると二十代前後の兵隊達が七人、吾家の風呂に入りに来ていたのであった。」そして、近所の山から20本ほどの巨木が伐られた時、倒された木にとりすがって鳴咽する村の旧家のおばあさんや、息をひそめて見守る兵隊達の光景などが鮮やかな記憶として残っているとのことです。

当時を知る人も少なくなり、伐木された「三角杉」の話どころか、内山に伐木隊が宿営したことなど語り継がれることがむずかしくなる中、小説『安曇野』によって伝えられることでしょう。終戦から30年ほど経った、昭和51年9月に白井氏ら17〜18名の隊員が内山妙典寺で再会したそうです。



戦争で供出し、釣鐘のない妙典寺鐘樓堂